

第3回
Matsunoto Seicho

松本清張

研究奨励事業
研究報告

松本清張の戦争と衛生兵の朝鮮体験

南 富鎮

北九州市立
松本清張記念館

松本清張の戦争と衛生兵の朝鮮体験

南 富鎮

一、はじめに

松本清張の作品の中には韓国・朝鮮を扱った作品が多く、しかもそれ

は清張自身が試みた多様なテーマと時代にわたっている。古代史、現代推

理、時代物、社会小説などの、清張の膨大な作業のはとんどのジャンルと
テーマにわたり、韓国・朝鮮は重要なキーワードとして頻繁に登場して
いるのである。

まず、日本古代史に関するものとしては、「古代史疑」(『中央公論』昭
41・6・42・3)、「古代探求」(『文學界』昭46・1・47・11)をはじめ多
くの座談会などで、日本古代史と渡来人との密接な関連が論じられている。
また近世や近代史に関するものとしては、文禄・慶長の役の朝鮮人捕虜を
扱った「秀頼走路」(『別冊小説新潮』昭31・1)、文禄・慶長の役が素材
になつてゐる「厭戦」(『別冊新日本文学』昭36・7)、伊藤博文の朝鮮で
の活動を描いた「統監」(『別冊文藝春秋』昭41・3)、朝鮮人の無政府主義者を扱った「朴烈大逆事件」(『昭和史発掘』所収)、朝鮮の左翼評論家
林和を描いた「北の詩人」(『中央公論』昭37・1・38・3)などがある。
さらに朝鮮での戦争体験を推理小説風に書いたものとしては、「百済の草」
(『絢爛たる流離』所収)、「走路」(『絢爛たる流離』所収)、「赤いくじ」

(『オール讀物』昭30・6)、「遠い接近」(『週刊朝日』昭46・8・6・47・
4・21)、「網」(『日本経済新聞』昭50・3・9・51・3・17)、「任務」
(『文學界』昭30・12)、「繁昌するメス」(『週刊文春』昭37・1・1)など
がある。ほかにも、社会問題を扱つたものに、美術界の内情をあばいた
「真贋の森」(『別冊文藝春秋』昭33・6)、戦後社会の在日朝鮮人を扱つた
「日光中宮祠事件」(『週刊朝日別冊』昭33・4)があり、朝鮮戦争を背景
にした「黒地の絵」(『新潮』昭33・3・4)、「謀略朝鮮戦争」(『日本の黒
い霧』所収)、「尊嚴」(『小説公園』昭30・9)などがある。

清張文学に見られる韓国・朝鮮を扱つたこれらの多くの作品は、単に清
張文学の幅広さを示す証拠として片づけられるものではない。それらの根
底には、清張の朝鮮体験が存在しており、それがまた戦争体験と重なるか
たちで、戦後文学としての清張文学の大きな土台になつてゐるからである。

戦後文学は、いうまでもなく、戦中社会から突出したものではない。社会
においても個人においても、戦中体験は戦後社会にかたちを変え、あるいは
そのまま生き続けている。それが顕著に現れているのが戦後社会を描く
清張の戦中体験といえるであろう。

松本清張の戦争体験といえば、朝鮮での衛生兵の体験がある。本論では、
朝鮮に關する作品を通して清張の戦争体験を辿りながら、衛生兵として
の朝鮮体験をも同時に考察する。そのなかで、松本清張の朝鮮体験の実体
を明らかにしたい。またこれらの考察によつて、戦後文学に強烈に流れる
清張の戦中体験も自ずから浮き彫りにされると思われる。

二、衛生兵の朝鮮体験

年譜によれば、松本清張は一九四二年（あるいは四三年）の十二月（あるいは十月）、日頃の軍事教練に不熱心なため三ヶ月間の教育召集を受け、一九四四年（あるいは四三年）の六月に再召集されている。二等兵として福岡の第二十四連隊に衛生兵として入隊した清張は、ニューギニアに送られるべく朝鮮へ渡る。京城で一時駐屯したのち、新兵团の師団軍医部付の衛生兵として朝鮮南部の井邑に移り、そこで敗戦を迎えていた。以上が、多くの松本清張の年譜に共通した記述になつてゐる（一）。年譜でのこうした記述は、自伝の「半生の記」によつて裏付けられたもので、さらに朝鮮での兵隊体験は多くの作品のなかで再確認することができる。しかし、従来の松本清張本人の記憶や提出資料を元に作成された年譜的な記述はやや正確をかき、ここではまず、作品と関連する年譜上の事実を補うかたちで、若干の問題についてふれておく。

松本清張は南方戦線に送られるべく、一時、京城の竜山に駐屯したが、この竜山での兵隊体験は、「半生の記」「厭戦」「網」「任務」「遠い接近」などでそれぞれ生かされている。清張が送られた京城竜山は、日露戦争以来、日本の植民地軍事施設の中心的な町であった。明治三十七年四月、日露戦争の後援部隊として韓国駐箇軍司令部が創設され、それが合併による朝鮮駐箇軍司令部として名称変更されたのち、大正七年六月に朝鮮軍司令部として再編成される。竜山には明治四十一年以来、これらの部隊の司令部と衛守病院、その隸下部隊が常駐していた。大正十年以降、朝鮮軍は二個師団の体制で羅南の第十九師団と竜山の第二十師団（第七八連隊、第七

九連隊）が編成されるが、これが戦争末期になると内地からの増援部隊と朝鮮人志願兵や徴兵により、その兵力は大きくふくれあがる。松本清張が南方に送られる補充兵の兵团として、既に南方に転進した第二十師団の留守地に駐屯していたのはこの時期である。しかし、南方動員の計画は座礁し、その代わりに朝鮮防衛のため、一九四五五年四月に二つの兵团が組織される。第一五〇師団（井邑、通称「護朝」）と第一六〇師団（裡里、通称「護鮮」）がそれである。清張が所属した朝鮮南部守備隊の第一五〇師団は、井邑の井邑農林学校（現在の井邑農工高等学校）に駐屯していた。師団長は三島義一郎中将、兵力は一四七九七人で、衛生班付である（二）。「赤いくじ」で見られる「守朝兵团」と「備朝兵团」、「遠い接近」の「護朝師団」と「護鮮師団」というのは、それぞれ第一五〇師団と第一六〇師団であると思われ、「赤いくじ」での高敞の「農学校」に駐屯した「第何千何百何十部隊」というのは、第一五〇師団を指しているように思われる。

また、清張の多くの作品の背景になり、第一五〇師団が置かれた農学校というものは井邑農林学校（一九一〇年開校、井州市水城里四四三番地）のことである。市内の中心部に位置する農業学校は、周囲をなだらかな山に囲まれた小高い丘に位置し、駐屯地としては絶好の場所に位置していた。当時の中心街である日本人の本町（現在の中央通）とは至近の距離で、学校の右側には井邑神社（現在は李舜臣記念公園になつてゐる）を控えており、川の向こうには忘想峯（現在の井邑詞公園）を正面に向かえていた。その井邑から北の二十六地点には、「百濟の草」「走路」の背景になつている百濟の古刹母岳山金山寺がある。

もうひとつ、松本清張の戦争体験においては衛生兵体験が重要である。

松本清張の作品では衛生兵の体験がよく出ているが、清張自身は朝鮮京城での衛生兵としての経験を振り返り、その生活は「両棲動物のようなもの」

だったと回想している⁽³⁾。衛生兵の本質を的確にあらわした言葉である。

衛生兵はその小規模の組織と任務の性格上、独立に編成されることはあまりなく、中隊付、連隊付、師団付という形で組織されることが多い。本科兵と同じ内務班生活をしながら、本科兵が訓練や戦闘に携わっている間に、別個に医務班通りをするのである。衛生兵はこうした組織上、また非戦闘員である性格上、兵隊内部では強い差別の対象になりがちである。兵隊であるかどうかさえ疑わがちな、清張のいう「両棲動物」のような、宙吊りの奇妙な存在が衛生兵なのである。清張自身の体験として描かれた「任務」には、そのような衛生兵の性格がよく現れている。

軍隊での、衛生兵のアグ名は、「ヨーチン」というのです。何でも治療の薬はヨードチンキだけで処理するところからきた軍隊用語ですが、無論、本科の兵隊が衛生兵を一人前の兵隊として見ない、一段にも二段にも見下す呼び名でした。私の胸に貼りついた濃い草色の小さな山型が、その屈辱の表徴でした。……

しかし、医務室は本科の兵隊より衛生兵達がわずかに持ち場の誇りを味う場所でした。顔蒼ざめて元気なく、軍医に病状をほそほそ訴える本科の兵隊の様子は哀れでした。われわれは意地悪い目付で彼らを見ました。班内で傍若無人に初年兵に制裁を加える不逞の破片もないのを軽蔑していました。……此處では、上等兵でも、おい、ヨーチンとも云はず、こら、衛生兵、とも云いませんでした。彼らは弱い声

兵隊の中で衛生兵は差別の対象ではあるが、それは必ずしも一律的なものではない。非戦闘員という立場から差別されながらも、一方ではその職務的な特技によって一種の権力さえ持っているのである。「ヨーチン」と蔑まれ、差別的な制裁を受ける一方で、場合によつては「衛生兵殿」とも呼ばれるのである。つまり、「ヨーチン」と「衛生兵殿」の間で活潑動く存在が衛生兵なのである。

清張文学の出発とその形成を論じる際、彼自身の兵隊体験においての次のような特異な感覚がよく引用される。

ところが、この兵隊生活は私に思ひぬことを發見させた。「ここにくれば、社会的な地位も、貧富も、年齢の差も全く帳消しである。みんなが同じレベルだ」と言う通り、新兵の平等が奇妙な生甲斐を私に持たせた。朝日新聞社では、どうもがいても、その差別的な待遇から脱けきれなかつた。……

兵営生活は人間抹殺であり、無の価値化だという人が多い。だが、私のような場合、逆な実感を持つたのだ。⁽⁴⁾

教育訓練の体験を述べたこうした特異な感覚は、社会と職場における不公平さから由来する松本清張の強烈な反抗精神の根柢としてよく取り上げられる。そしてこうした感覚は、社会から冷遇された清張にとっては、軍隊さえも人間の公平性が保証される場所として受け取られた、というふう

で、衛生兵殿とよんでもくれました。⁽⁴⁾

に解釈され易い。しかし、注意したいのは、清張自身が軍隊を平等な社会であると言つてはいるのではないことである。軍隊に比べれば社会の不平等と理不尽が一層ひどいことを逆に強調することで、軍隊が社会とは全く異質の別個の集団ではなく、強烈に社会を反射していることを言つてはいるのである。軍隊が単に「人間抹殺」や「無の価値化」ではないのはそのような意味である。また軍隊での平等は、清張自身がいうように、あくまでも「新兵の平等」である。新兵訓練や本科兵同士の間だけでは、このような平等感覚がある程度有効であるが、それが隊付きの衛生兵になると、事情がまったく違つてくる。多くの兵隊は基本的には階級に左右されるが、その職務（補職）によつても奇異な権力関係がなり立つてゐるのである。

たとえば、清張の「任務」のなかでは、「一等兵の『私』」は衛生兵であるがために患者の三上二等兵に侮辱をうける。また、「遠い接近」では釜山の兵事係出身の上等兵が一等兵の山尾に追従するのである。それがまた、衛生兵の場合になると、その宙ぶらりんの立場から、兵士としては差別されながらも、医務班ではその特技によるある種の特權を持つており、一概に平等ではないのである。しかし、ここで問題にしたいのは、衛生兵という宙ぶらりんの特殊な状態が松本清張の兵隊経験で重要な意味を持つということである。宙ぶらりんの視線によつて、士官のもつ権力者の横暴と腐敗が観察でき、また一方では、同じ兵卒でありながらも部外者としての距離によつて、兵卒社会に充满する狡猾さや俗物性をも同時に観察できるのである。つまり、「ヨーチン」と「衛生兵殿」の間で揺れ動く複眼的な視点なのである。それが権力者への強い批判と同時に、兵隊のような底辺社会にいる者たちの俗物性と狡猾さへも目を向けさせるのである。

松本清張文学では、高級官僚や国家システムだけではなく、下級官吏の狡猾と利己心も同時に描かれており、また社会の底辺の者たちのもつ卑劣さと俗物性が同等のレベルで描かれている。清張の批判精神は、ひたすら権力者や官僚への批判に終始するかたちの、いわゆる「民衆的な視線」をとらない。それには、人間と社会組織の俗物性を否応なく体験した、衛生兵としての複眼的な視線が大きく関係しているようと思われる。

それでは、清張の朝鮮での衛生兵体験がどのように作品のなかで現れてゐるか、時間的に辿つてみよう。

三、教育召集

松本清張の兵隊体験のなかで、最初のもので、もつとも強烈な体験になつてゐるのは、教育召集のことである。清張自身の回想と松本清張記念館調査資料によれば、清張は軍事教練に不熱心なため、昭和十八年十月二十二日、久留米第一四八連隊（第五六師団）で昭和十九年一月二十一日までの三ヶ月間の教育召集を受けていた。生活の苦労から軍事訓練にあまり出席できなかつたための懲罰的な召集で（清張自身は頑なにそう思つていた）、その経験を清張は次のように回想する。

指定された日に検査場に行くと、ほかの召集者からみると年輩者のはうになつてゐる。私が私の顔と令状とを見比べて、おまえ、教練にはよく出たか、と訊いた。あまり出ていないと言うと、ははあ、それでやられたな、とうなづいて言つた。この一言は今でも耳に鮮かに残つ

ている。教練に不熱心な者は懲罰的に戦場に引張り出すくらいのことは市役所の兵事係には出来たらしい。人間の生命など、案外こんな

一役人の小手先で自由になるものだと知った。市内各地区の教練成績表などを取り寄せて、市役所の兵事係か何かが出席率の悪い者をチエックしたのかもしれない。しかし、これに似たようなことは現在でもどこかで平気で行われているのではあるまいか。幸い私は無事に帰つて来たからよかつたようなものの、南方の激戦地にでもやらされたら命は無かつただろう。市役所の吏員のほんのちょっとした鉛筆の動かし方で家族六人の運命が狂つたかもしれないのだ。(6)

教育召集を通じて、清張は人間の運命が下級官吏の小手先に左右されるという強烈な体験をする。権力を盾にした小役人の気まぐれと利己心によつて、弱い立場の人間の運命が翻弄されるという、衝撃的な体験を身をもつてしたのである。清張は、こうした教育召集の体験を、時代をこえる人間社会の普遍的な問題として取り上げている。役人の気まぐれと些細な利己心によって一生を棒にふる江戸時代の流人の話を扱つた「流人騒ぎ」(『オール讀物』昭33・3)、小役人による懲罰的な制裁を描いた時代小説「町の島帰り」(『オール讀物』昭32・9)、「佐渡行人行」(『オール讀物』昭32・1)などがそれである。(7)

もうひとつ、教育召集の経験を下敷きにして推理小説風に書いた作品に

「遠い接近」(『週刊朝日』昭46・8・6・47・4・21)がある。「遠い接近」

は清張自身の軍隊経験にそつて書かれた自伝性の強い作品であるが、そこには清張の実体験をもとにしたと思われる教育召集の実態がこと細かに描

かれている。

自営の色版画工の山尾信治は、六人の家族を扶養しながら、生活に追われる三十二歳の男である。戦争は日々激しくなるが、山尾自身は、徴兵検査で第二乙種に判定され、しかも三十二歳という年齢もあり、戦争に動員されることはないと思っていた。しかし、ある日突然、山尾は三ヶ月間の衛生兵の教育召集を通知される。三ヶ月の留守は、一家七人の生計を預かっている自営業の彼にとっては大きな打撃であったが、三ヶ月の教育召集なら致し方ないと思い佐倉の兵営に入召する。だが、三ヶ月で終わるはずの教育召集が本召集に切り替えられ、山尾は衛生兵として朝鮮の京城に渡る。山尾は三十二歳の第二乙種である自分の召集に疑問をもち、それを密かに調べていくうち、自分への召集は日頃の教練にあまり出席できなかつたことへの懲罰だったことがわかる。いわゆる「ハンドウを回された」のである。そして、懲罰的な「ハンドウ」を回した張本人が、市役所の河島兵事係長であることを突き止める。一方、生活の柱である家長を兵隊にとられた山尾一家は、やむなく広島に戻らざるを得ず、ついには原子爆弾で一家は全滅する。復員した山尾は、一役人の小手先の仕事が自分の人生を大きく狂わせたことへの復讐心から河島を殺害する、というのが「遠い接近」の大まかな筋である。推理小説的な部分を除けば、清張自身の実体験が多く重ねあわされた作品である。また「遠い接近」では、「半生の記」の記述を繰り返すかのように、主人公の山尾は次のようにいう。

おそろしいことである。町内の軍事教練に出られなかつたばかりに、一家の崩壊という運命に直面させられている。それだけではなく、も

し南方戦線に行くという噂が真実なら生命を失うことになるかもしないのだ。こんなひどい懲罰があるうか。自分は教練には出なかつたのではなく、出られなかつたのである。生活の仕事に追われてその時問がなかつたのだ。(中略)

召集令状用紙にさらさらと名前を書く区役所の兵事係にとつては、年賀状の宛名を書くほどにも感情は動かなかつたにちがいない。が、受け取つた者の運命は死にもつながる。池に小石を投げこむ子どもは悪戯の面白さからだが、池の蛙には生命がけだという童話が、このときほど信治の胸に蘇つたことはなかつた。(8)

こうした教育召集の体験は、清張文学の社会批判の精神に直結していく。清張文学にみられる人間と社会への厳しい批判は、まさにこのような凄惨な兵隊体験によつてもたらされたものといえる。

さて、清張自身は、教育召集から約五ヶ月くらい後の、昭和十九年の六月二十八日、再召集され、衛生二等兵として朝鮮に渡る。朝鮮の京城と井邑での、約一年くらいの衛生兵の生活が始まるのである。そして、それらの衛生兵体験は、前述した「遠い接近」と「網」「赤いくじ」「厭戦」「任務」「百済の草」「走路」などで描かれる。

四、京城竜山

清張は昭和十九年六月二十八日、歩兵第八六師団第一八七連隊に編され、南方に転進している京城竜山の第一十師団第七八連隊第六中隊に編

入されるが、この前後の朝鮮軍の状況を簡略に紹介する。

朝鮮軍は、昭和十八年に至るまで平時約六万の兵力を維持していたが、昭和二十年になると、二十四万人にふくれあがる。南方へ送るべく、日本からの混成部隊の到着と、朝鮮人志願兵の入隊、また十九年から始まつた朝鮮人徴兵などによる兵力の増加があつたのである。朝鮮軍の主力である竜山の二十師団は昭和十八年一月に、羅南の十九師団は昭和二十年一月にそれぞれ南方に転進し(9)、その留守を内地と朝鮮の日本人補充兵、朝鮮人志願兵、朝鮮人徴兵によつて穴埋めし、それがごつた返す状況で兵力がふくれあがつてゐたのである。朝鮮軍は昭和十九年にも三個師団を南方に送つていたが(10)、昭和二十年になるとアメリカ潜水艦の攻撃による被害の増大と戦局の劣勢から、アメリカ軍の上陸が予想される濟州島防衛と朝鮮南部の西海岸の上陸防衛に戦略を変える。昭和二十年一月、朝鮮軍は十七方面軍と朝鮮軍管区に再編成され、その任務を南方支援から朝鮮守備に切り替え、清張が転属していた第九六師団や一五〇師団、そして姉妹兵团として一六〇師団などが同年五月までに次々と再編成される。清張は、朝鮮に渡つた当初、兵力でごつたがえす京城竜山で、補充兵で構成される第二十師団第七八連隊の隊付衛生兵として勤務する。その後、昭和二十一年三月には第九六師団二九二連隊、四月には第一五〇師団第四二九連隊に編入され、師団軍医部の衛生兵として井邑に転出して敗戦を迎えるのである。松本清張の兵隊経験を書いた小説の多くはこうした朝鮮軍の変動についているのである。そして、こうした衛生兵としての京城竜山での体験を早い段階で書いたのが「任務」である。

「任務」(『文學界』昭30・12)は京城竜山での衛生兵体験を描いたもの

で、清張文学ではめずらしく、私小説の形式で綴られている。三十四歳で教育召集を受けた「私」は、久留米での三ヶ月の教育召集が終われば帰れると思つたが、そのまま本召集に切り替えられ、ニューギニアに送られるべく、朝鮮竜山に渡る。隊付衛生兵をしていた私は須田軍医見習士官のもとで働く。その時、同じ内務班の頭の禿げた三十五歳の三上二等兵が肺炎を起こしているが、須田軍医のいい加減な仕事から三上は入院が許されず、病状は悪化する。その三上看病する任務をもつていて私も衛生兵がもつ屈折したプライドから三上を積極的に看病しない。その内、病状が悪化した三上はやつと入院させられるが手遅れになってしまい、冷たい病室で無惨な死に方をする。三上の死の床からは妻からの手紙一通と愛人からの手紙三通が発見される。その生活臭を目にした私は三上の死体の前ではじめて「任務らしい感情」を抱くことになる。

差別的な待遇を受ける衛生兵の立場と、兵営のなかで死んでいく兵士の悲惨な最後、そのなかでの些細なプライドによる兵隊たちの微妙な葛藤など、兵隊内部の哀れな人間関係が描かれている。当時の兵士たちの厭戦気分を浮き彫りにしながら、清張自身の戦争と兵隊生活への批判が強烈に現れており、いずれも清張の京城での衛生兵体験が下敷きになっている。こうした朝鮮での衛生兵体験は「厭戦」のなかでも繰り返されている。

「厭戦」（別冊新日本文学 昭36・7）は、清張自身の竜山での衛生兵経験が豊臣秀吉の朝鮮侵略時の一人の武士に仮託されるかたちで、「任務」と同様、私小説風につづられている。朝鮮の竜山で衛生兵として召集された「私」は、異国での兵隊生活と厭戦気分から、村に伝わる針尾左平伝説に想いをよせる。針尾左平は、文禄・慶長の役に兵士として朝鮮に渡った

が、異国で死ぬよりは、本国に逃げ帰りたいという一心から、戦場を脱出して故郷に逃げ帰ってくる。故郷に戻った左平は、密かに家族に連絡をとり洞穴で暮らしていくが、やがては追っ手に発見され家族もろとも処刑される。処刑の瞬間、左平は異国で死ぬよりは家族と一緒に死ぬことを無上の喜びと感じる。朝鮮に衛生兵として徴集されている「私」は、左平に想いを寄せながら、故郷に帰りたいとの一心の思いで無念に死んでいく多くの兵士の最期を見届ける。そのうち、「私」は異国で無念に死ぬよりは家族と再会して処刑される左平の喜びにますます理解を示す、という筋である。衛生兵として竜山で体験した厭戦気分を清張自身の実感として綴つたものである。そして、作品の重要な素材として、「任務」でのエピソードがもう一度紹介されている。

昭和十八年の夏、三十二歳で久留米の連隊から召集された「私」は、衛生兵として朝鮮竜山の医務室で勤務していた。その時、四国の松山で洋服屋をやつていた同じ中隊の三十八歳の山口二等兵が診察にきた。山口二等兵は急性肺炎であつたが、兵隊の荒っぽい仕事に慣れてきた見習士官の手遅れた处置で入院が遅れてしまい、脳症を起こしてしまった（軍隊式のい加減な診察をする見習士官は「遠い接近」でも紹介されている）。手遅れになつて陸軍病院の冷たい病室に運ばれた山口二等兵は、いよいよ精神が錯乱し、隣のベッドの脳症患者と声を合わせて、一、二、三、四と数を唱えながら、最後には息を引き取る。そして、死んだ山口の枕元からは病氣を心配する妻からの手紙が五、六通出てきた、というエピソードである。「任務」でのエピソードとほぼ重なつているが、こうした急性肺炎から脳症による死は「石の骨」（別冊文藝春秋 昭30・10）での黒津の妻ふみ子

の死にも見られるものである。

一方で、朝鮮の衛生兵体験を推理小説風に仕立てたものとして「繁昌するメス」（『週刊文春』昭37・1）がある。「繁昌するメス」の大宮医院の院長は評判の手術医であるが、じつは彼の本名は戸村で、正式の医者の免許を持っていない。朝鮮で衛生兵として勤務した戸村は、そこでの経験を活かし、終戦後のざくさのなかで免許を偽造して医者になりすましていたのである。しかし、その秘密が朝鮮での上官であった望月軍曹につかまえられ、さんざんゆすられる。それに耐えかねた大宮は望月軍曹を手術の失敗を装って殺害する。しかし、望月軍曹の愛人の「兄」を名乗り、大陸で衛生伍長の経歴をもつ男に暴露される、というストーリーである。朝鮮での兵隊体験が戦後社会にも尾を引き、それが新たな犯罪に結びついているのである。生体実験をした医者の話が書かれた「皿倉学説」（『別冊文藝春秋』昭37・12）なども、朝鮮が直接な背景になつてはいないものの、朝鮮での衛生兵体験が下敷きになつていると思われる。

同じく推理小説「遠い接近」は、清張のすべての兵隊経験が網羅されたもので、兵隊内部での階級による上下関係、それによる暴力と追従の関係が赤裸々に描かれている。教育召集の新兵に対する古参兵の凄惨なリンチ（私的制裁）、古参兵の横暴と新兵の阿諛と屈従の関係、さらに階級をこえる年期と職務（補職）などであらわるさまざまな力関係が、清張自身の兵隊体験に踏まえられて生々しく描かれている。一等兵の安川の暴力の前に逃げまどう兵長や伍長の存在があり、その一方では、池田衛生一等兵に阿諛する安川、山尾衛生一等兵にへつらう釜山市役所出の上等兵との関係があり、階級と年期と補職の特權による兵隊の複雑な上下関係が描かれて

いる。それと同時に、一般兵の衛生兵への差別的な態度も紹介されている。安川は、山尾らの衛生兵を指し、「昔はな、輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々トンボもトリのうち、といった。ヨーチンも蝶々やトンボだった」と軽蔑する。衛生兵は本科兵からこのような差別的な視線で見られていたのである。しかしながら、衛生兵は本科兵がもつていらない技術をもつていて。それが兵隊のなかでは場合によつて一種の優越感にむすびつく。そのため、衛生兵は極端な差別の対象になりながらも、ある種の特權をも享受できる。安川が、衛生兵を軽蔑しながらも池田衛生一等兵にはまつたく頭があがらず、朝鮮では山尾にも追従する態度を示すのは衛生兵のもつ優越的な立場によるものである。特技をもつ人間にに対する差別と特權の構造がそこにある。

清張は、このような技術者の特権と差別の構造を江戸時代の鉄砲師の話として「特技」（『新潮』昭30・5）のなかで書いているが、衛生兵体験は、「特技」や「火の縄」での鉄砲の名手稻富伊賀の人物像にも投影されているように思われる。稻富伊賀が一人前の武士として扱われないよう、衛生兵も一人前の兵士として扱われていなかつたのである。採鉱技術に長けた大久保長安の運命を描いた「山師」（『別冊文藝春秋』昭30・6）にも技術者がもつ明暗の側面が描かれている。

さらに、竜山の兵隊体験が背景になつてているもうひとつの推理小説として「網」（『日本経済新聞』昭50・3・9・51・3・17）がある。小説家の小西康夫は中北新聞の沼田社長から連載小説を依頼されるが、沼田はかつて朝鮮の二十二連隊での小西の古参兵であった。ちょうど、衆議院選挙が行われ、小西は選挙に積極的に介入する。同じく朝鮮での上官であった大坪見習士官の部下齊藤上等兵も深く加担するが、選挙には負け、大坪士官

と斎藤上等兵は選舉違反で逃亡する。逃亡中に大坪士官は斎藤上等兵に殺害される。斎藤上等兵が大坪を殺したのは、大坪がお金をゆすろうとしたのが軍隊の「信義」に反したからである。そして、主人公の小西は知らないうちに一人の逃亡資金を中継する役を担わされた、という話である。京城竜山の軍隊での人間関係が三十年以上も生き続けるかたちで事件と結びつく。「網」では、京城竜山の二十二部隊での経験、教育召集と本召集による朝鮮への転送など、軍隊経験が小説の背景になつており、衛生兵の体験自体は前面に出でていない。作品での小西は、昭和十八年春に教育召集をうけ、十二月に千葉の連隊から福岡に送られ、混成旅団として南方へ送られる予定であったとされる。そして、作品中には軍隊での「信義」の定義が繰り返され、それに縛られている戦後のな人間模様が犯罪を生みだしているのである。

このように朝鮮竜山での衛生兵体験はさまざまな作品の中に取り込まれ

れ、またその素材も多くの作品にちりばめられている。そして、こうした朝鮮での兵隊体験は場所を朝鮮南部の井邑に移し、さらに一層深まつていくのである。

五、井邑

松本清張は昭和二十年四月七日、朝鮮南部の井邑に転属されているが、終戦前後期の井邑を背景にした作品として、連作小説『絢爛たる流離』の「百濟の草」と「走路」、短篇小説「赤いくじ」がある。

「百濟の草」と「走路」は、連作小説『絢爛たる流離』（婦人公論）昭

38・1～12）の一部として書かれたものである。『絢爛たる流離』は、一個のダイヤモンドの行方を軸にし、それをめぐる様々な人間模様と時代を書き写した連作もので、「百濟の草」「走路」は一連の作品のなかで一続きのものとして書かれたものである。まず、「百濟の草」の内容から見てみよう。

鈴井物産鉱業所の技師として朝鮮全羅北道金邑に赴任した伊原雄一は、京城竜山に召集されたのち、妻が居残る金邑の南朝鮮軍司令部に配属される。運良く妻の留守宅と至近の距離に転任された伊原は、すぐにも妻にあえると期待を膨らませていた。しかし、どういうわけか、妻とあえる便宜は一向に計ってくれない。その原因を調べた伊原は、自分に外出が許されないのは、妻の留守宅に下宿し、妻に想いを抱いている柳原高級参謀の仕業であると判断する。そこで伊原はやむなく参謀の当番兵である中田上等兵から公用腕章を借り、密かに金山寺で妻との密会を重ねる。そんなある日、柳原参謀は金山寺の境内で殺害される。しかし、殺人事件の調査はうやむやになり、事件の直後、伊原と中田上等兵は秘密裏に沖縄の戦地に送られる。居残った高杉軍曹は、二人の密会に気づいた柳原高級参謀が伊原の妻を脅かして金山寺での密通を強要したため、伊原の妻に誘い出され殺害されたと推測する。

「走路」は、「百濟の草」の事件後、京城から新しく赴任してきた篠原主計大尉の話が中心になって展開する。篠原は金邑に赴任した当初から伊原雄一の妻の寿子に密かに恋心を抱く。そんなある日、篠原は金山寺への散歩の途中、山田技師長と伊原寿子がたびたび金山寺に出入りするのを不審に思い尾行してみると、山田は境内に短波ラジオを隠して重慶からの戦況放送を聞いていた。篠原はその場で山田技師長を脅迫し、朝鮮脱出の計

画を持ち込む。これに金邑内地人会長の大石が加わり、三人は敗戦の直前に軍の給料を横領して日本へ脱出する計画を立てる。出発当日、山田は伊原寿子を連れてくるが、伊原寿子をめぐつて三人は互いに牽制し合う。やがて、木浦から日本を目指す船のなかで、篠原は大石と山田を殺害し、伊原寿子とすべての金銭をわがものにする。

まず、この二作で指摘したいのは、清張自身の井邑での軍隊体験を下敷きにするかたちで、井邑とその近隣の風土が巧みに取り入れられていることである。井邑が「金邑」、井邑農業学校が「農学校」、一五〇師団が「南朝鮮軍司令部」というように、固有名詞が一部変えられているが、ほかの百済時代の名刹母岳山金山寺、木浦、光州、院坪里、金溝里などは実名のまま事件の舞台になっている。そして、事件はおもに農学校と金山寺を中心として開幕する。伊原雄一と妻寿子は金山寺の境内で密会を重ねており、柳原高級参謀の殺人事件も境内で行われる。また「走路」での篠原主計大尉は、伊原寿子を待ち伏せするため金山寺に出入りし、山田技師長も境内に短波ラジオを隠して日本の降伏情報を得るために重慶放送を密かに聞いている。事件にかかわるすべての日本人が、散歩がてらに金山寺によく出入りし、それが後に事件とななる。先述したように、母岳山金山寺は實在の古刹で、作品中にも「後百済朝には堂塔数百を数え、全羅第一の巨刹」と紹介されている。金山寺は百済の法王元年（西暦六〇〇年頃）、王の命によつて創建された百済王室の寺で、弥勒信仰と華嚴思想の中心道場である（¹¹）。そして作品では、殺人事件と様々な陰謀と謀略がこの古寺のなかで行われ、それが井邑市内の農学校と日本人町と緊密につながっているのである。

しかしながら、実際と小説における井邑と金山寺との関連については距離の相違がある。作品では金山寺が井邑市内に存在しているかのように設定されているが、実際の金山寺は井邑から約二十六キロほど離れた山中にある。つまり、実際の金山寺は、作品でのように、柳原高級参謀や伊原寿子、伊原雄一、篠原主計大尉、山田技師長などがちょっとした散歩がてらに立ち寄る距離ではないということである。もちろん、参謀殺害の伊原アリバイが成立する時間的な距離でもない。作品での金山寺の描寫や、その周辺地域の正確な記述から、松本清張自身は、井邑と金山寺との実際の距離を正確に把握していたと思われる。また清張自身が衛生兵としての外出の際、考古学と古代史に興味をもつ清張が金山寺に立ち寄った可能性も十分にある。しかしながら、現実的な距離からすれば不可能な井邑と金山寺をつなぐ線が、作品では金山寺を井邑の市内に設定することで可能ならしめている。二十六キロという現実的な距離が、作品では三、四キロ以内に縮められているのである。これは、井邑の近くにめぼしい寺院がなく、やや離れて母岳山金山寺という古寺があることにもよるが、いつもでは松本清張の推理小説的な加工によるところも大きいといえる。となると、作品では金山寺を井邑の何処に設定したのだろうか。これは清張文学の風土性と小説的な加工を解くひとつのかぎにもなると思われる。

ここでひとつ、推測になるが、作品での金山寺の位置は、今日の井邑公園に設定されたのではないかと思われる。市内からやや離れた距離からしても、また伊原が農学校から毎日眺めるという位置関係からも、やや小高い山になつてある井邑公園が一番適した場所のように思われる。もうひとつ、井邑公園こそ作品内容とも密接に関わっているからである。井

邑といえば、百濟の古歌「井邑詞」でよく知られる町である。「井邑詞」は現存する唯一の百濟古歌で、その名前のとおり井邑を舞台にした歌である^[12]。行商に出ている夫の身を案じ、小高い丘に登つて月を眺めながら、夫の帰りの無事を心配するという内容である。これが後に、いくら待つても戻つてこない夫を待ち続け、ついに石になつてしまつたという、いわゆる「望夫石」伝説になつて今日まで伝わつてゐる。現在の井邑詞公園には、「望夫石」という石が祭られており、また年に一回井邑詞祭りが行われるなど、夫を待つ女の伝説は井邑のひとつのシンボルになつてゐる。そして、その中心場所が井邑詞公園である^[13]。

さて、作品に戻ると、伊原は妻との再会を切実に望んでいたが、柳原高級参謀の妨害でなかなか妻に会えない。そこで伊原は密かに脱糞し金山寺で妻との密会を重ねる。しかし、夫婦の再会への欲望が、結果的に柳原参謀に籠絡される口実を与え、再会の場所であつたはずの金山寺が籠絡される場所に代わるのである。そこで伊原の妻は高級参謀を殺害したのである。こう見てくると、「百濟の草」は、「井邑詞」伝説の、夫を待つ女の悲しみのテーマとも符号しているように思われる。その井邑詞公園の役割を担っているのが母岳山金山寺である。松本清張が「井邑詞」にまつわる井邑のこのような風土性を知つていたかどうかは推測できないが、「百濟の草」ではそれが見事に取り込まれてゐる。さらにそれは「赤いくじ」にも同様に見られる。「赤いくじ」には、出征軍人の妻の心境を表すかのように、婦人によるウイリアム・ブレイクの訳詩（蒲原有明訳）の朗読場面がある。「ああ、日向葵や、日のあゆみ／ひねもす数え、待ちつけて、／天路の涯にありという／黄金の邦にあこがる。」と、井邑詞に通じるような歌が

紹介されている。こうした夫の帰りを待つ女という素材は、「白い闇」（『小説新潮』昭32・8）、「ゼロの焦点」（『宝石』昭33・3～35・1）などでの、夫の失踪を突き止める女の執念とも通底しているように思われる。

井邑を背景にしたもう一つの小説として「赤いくじ」（『オール讀物』昭30・6）がある。「赤いくじ」は「百濟の草」の続編のような性格が強い。出征軍人の妻である主人公は、伊原の妻を連想させるが、時間的な設定は敗戦前後になつてゐる。敗戦間際、農学校に司令部をおく日本軍は婦人防衛班を結成するが、そのなかに夫をラバウルの戦地に送つてゐる塙西恵美子という美しい婦人がおり、彼女の美貌に惚れた楠田参謀長と末森高級軍医がそれぞれ接近する。しかし、敗戦に続くアメリカ軍の進駐で、戦争犯罪の追求におびえた高級参謀たちは、アメリカ兵を接待するため、接待役の女をくじ引きで決める。塙西恵美子も二十名の接待役に選ばれたが、アメリカ兵からはなんの要求もなく、ことは無事に收まる。しかし、引き揚げ列車のなかで、接待役の目的が皆に知られ、塙西は孤立するなかで、楠田参謀長と末森高級軍医の露骨な肉欲の対象になる。彼女を連れて逃亡する末森高級軍医を楠田参謀長が追い、追い込まれた高級軍医は参謀長を射殺して自決する。そして、二人の死は敗戦に悲憤して自決したものとして処理される。

「赤いくじ」は物語の推理小説的な筋を取り除けば、かなり多くの部分において、清張自身の井邑での兵隊生活、引き揚げの経験がそのまま踏まえられている^[14]。朝鮮守備のための二つの兵団と農学校、未亡人の宅に下宿する高級軍人の模様やアメリカ兵のための接待役の設置、さらに引き揚げの際の秋風嶺での印象と釜山での一時待機の場面などは、それぞれ

「半生の記」や「過ぎゆく日曆」のなかでも確認される。また「赤いくじ」では、井邑を背景にする「百濟の草」「走路」などと同じく、高級将校たちの欲望と腐敗、醜悪な権力構造が浮き彫りされている。竜山での衛生兵体験が戦争体験を中心しているとすれば、敗戦前後の井邑を部隊にした「赤いくじ」では兵隊内部の権力者の腐敗と醜悪ぶりに焦点が移っている。

そしてこれらの権力構造に対する批判は清張の多くの作品で見られる社会批判とも通底している。清張は「軍隊は、ある意味の官僚機構の縮図」といっているが⁽¹⁵⁾、朝鮮でのこうした衛生兵体験こそ清張の批判精神のひとつの原型をなしているようにも思われる。清張は「半生の記」で軍隊を「大きな無用が有効そうに通用」する組織と認識し、それは日本の官僚組織にも当てはまると言っている。官僚組織の実状をあばいた「現代官僚論」(『文藝春秋』昭38・1~40・11)もこうした軍隊体験の延長線にあるといえよう。

六、兵隊体験の小説的な加工

清張の朝鮮での衛生兵体験は多くの作品にその片鱗を見せており、もちろん、それがそのまま小説のなかで紹介されているのではない。当然のように、それには小説的な加工が必要である。そのような一例は、すでに金山寺と農学校の位置関係から見たが、それらのことは他の作品でも多く見られる。これに関連して、従来の論では「半生の記」や私小説的な作品に見られるこうした朝鮮体験が、そのまま正確な事実として受けとめられ、そのことによって多くの年譜的な混乱を招いてきたことも事実である。作

品からの類推による間違いで、私小説的な要素の小説的な加工の問題が無視されたのである。

まず、おもな問題として教育召集と本召集の時期と場所に関するものがいる。松本清張記念館調査資料によれば、松本清張は昭和十八年十月に久留米の連隊で三ヶ月間の教育召集、翌年の六月に本召集を受け、南方に送られるべく京城の竜山に送られている。さらに昭和二十年四月に第一五〇師団に編入され井邑に移される。しかし、実際の作品においてはこの時期がさまざまに変更されて設定されている。たとえば、教育召集に関しては「任務」では昭和十八年に教育召集を受け、「厭戦」では昭和十八年夏に、「遠い接近」では昭和十七年九月十五日に、「網」では昭和十八年春に設定されている(ちなみに「半生の記」では昭和十七年十二月)。また教育召集の場所は「任務」では久留米の連隊、「厭戦」でも久留米の連隊、「遠い接近」では佐倉の連隊、「網」では千葉の連隊になっている(ちなみに「半生の記」では久留米の連隊)。「遠い接近」「網」は、それが東京を舞台にした推理小説であることから教育召集の場所が東京近郊に変えられたのであろう。さらに、教育召集時の年齢においても相違がある。「任務」では三十四歳、「厭戦」では三十二歳、「遠い接近」では「三十二歳」、「網」では二十六歳に設定されている(「半生の記」では三十三歳)。また、本召集は「任務」「遠い接近」では教育召集から本召集に切り替えられたとされ、「網」では昭和十八年の春に教育召集が終わり、その年の十二月に赤紙がきたとされている(「半生の記」では教育召集三ヶ月の後に本召集)。

一方、竜山での衛生兵としての勤務であるが、これは「厭戦」「遠い接近」「任務」「繁昌するメス」などの朝鮮体験を描いた殆どの作品に共通す

る。ただし、「網」では衛生兵ではなく、陸軍歩兵に設定されている。さらに、京城竜山での転属部隊が「遠い接近」と「網」「半生の記」などではいずれも第二十二部隊になつてゐる（実際においては第七八連隊、または第二九二連隊）。

もうひとつ、京城竜山から井邑への転属であるが、それについては「任務」「厭戦」などでは触れられていない。「遠い接近」では南部に新しい兵团が編成されたことについての記述がなされている。

召集されてきた大阪の兵隊がまもなく部隊から出ていった。朝鮮の西海岸を防衛する兵团に編成されていた。朝鮮を北と南の二つに分け、北側の沿岸防衛が「護鮮」師団、南側が「護朝」師団という呼び名だつた。朝鮮にもいよいよアメリカ軍の上陸作戦があるかと思われた。

しかし、主人公の山尾一等兵は南部兵团に編入されず、竜山に居残り敗戦を迎えたという設定になつてゐる。それに比べ、「百済の草」「走路」では金邑（井邑）在住の主人公の伊原雄一が京城竜山に召集された後、金邑（井邑）の「南朝鮮軍司令部」に戻る設定である。さらに、「赤いくじ」ではこの二つの兵团が次のように記されている。

一九四四年（昭和十九年）の秋、朝鮮京城で二つの新しい師団が編成された。新編成師団の任務は、米軍の上陸に備えて、朝鮮の西沿岸を防備するというものであった。

二つの師団は受持区域を南北二つの朝鮮に割つた。ほんとうの名は

第何千何百何十部隊というのだが、『朝鮮を守備』するというので、この字まで二つに割り「守朝兵团」「備朝兵团」と称した。だから南朝鮮受持ちの師団の兵は、よごれた軍服の胸に、白い布を貼つて「備朝兵团」とへたくそな字で書き入れた。

このように、兵团の編成時期、師団の通称、師団の数字などは、実際のものが微妙に変えられている。ほかに、「赤いくじ」では農学校が井邑ではなく隣の高敞に設定されている。ある種当然かも知れないが、作品での朝鮮体験はそのままの事実を反映したものではない。そこには小説的な加工がなされているのである。召集と入隊時の年齢や場所についての若干の修正を加えたり、あるいは背景の固有名詞においても修正を加えている。また、場合によつては大幅に替えられているところもある。それらの度合いは、私小説と推理長篇小説、短篇小説と推理長篇小説においてそれぞれの相違が見られる。当然ながら、「厭戦」「任務」などの私小説は実体験により近いかたちで述べられている。私小説の形式に年譜的な若干の加工が加えられているのである。しかし、朝鮮体験にもとづいた作品は、清張の他の小説に比較すれば、全体として非常に実体験に近いかたちで書かれたものといえる。清張の作品では数の少ない私小説の形式で書かれた二作が、いずれも朝鮮での兵隊体験を描いていることも注目に値する。さらに、清張の推理小説の全体のなかにも、朝鮮体験ほど作品のなかでリアルに活かされたものは少ない。清張の推理小説には私小説的な要素が極めて少ないが、そのなかで比較的リアルに活かされているのが朝鮮での衛生兵体験であつたのである。それは朝鮮体験がそれほど強烈なものであつたということこ

とを証明するものであろう。

このように、松本清張はこれらの朝鮮体験をそのまま書いたのではなく、

そこに一定の小説的な加工をしている。数少ない私小説においても、清張

は年譜的な事実に若干の加工をしている。それが、「半生の記」に見られ

る年譜的な誤謬と相俟つて、清張の年譜においての諸説を生む原因にもな

っている。そして、このような小説的な加工は創作方法にも密接に関係し

ている。清張は「私小説は私の体質には合わない」とし、「そういう素材

を仮構の世界につくりかえる」のが「小説の本道」と述べている。朝鮮体

験を扱った私小説や推理小説、あるいは自伝的作品である「半生の記」で

さえ細部においては実際と相違があるのは、こうした清張の文学観を示し

ているともいえる。

七、清張の朝鮮風景

松本清張は約一年余り（一年三ヶ月）朝鮮に滞在していたが、朝鮮体験は実際の風景としても強烈な印象を残している。そのなか、もつとも印象的な風景として、ポプラの木に止まっているカササギ（鶲）がある。たとえば、「厭戦」には、

竜山の兵営は、赤煉瓦の堀で取り巻かれていたが、この堀が人の背より高いぐらいで、ひと跨ぎすれば外の道路に出られそうな感じだった。堀には白楊の樹が並び、その梢が空に直線に伸びているのだが、その間を首の白い朝鮮鶲（鶲）が群をして飛んでいた。

と、ポプラの樹の間を飛ぶカササギが印象的に語られている。同様の描写は「任務」「遠い接近」などにも見られる。

医務室は……建物の前後を囲つて、鉛筆のように直線的な白楊の群が高々と空に伸びて、そのいくつかには、朝鮮鳥と兵隊がよんではいる鶲が巣をつくつていました。（「任務」）

医務室は、兵舎から離れた丘の上にあった。赤煉瓦の細長い一階建だが、周囲にはポプラの木立がならび、空に向けて裸梢を突きあげていた。その枝には首が白く、尾の長い朝鮮鳥が止まつたり飛び上がりたりしていた。朝鮮鳥はカササギのことである。（「遠い接近」）

それらの風景描写は「半生の記」にも次のように語られている。

朝鮮の秋は美しかった。小高い所にある医務室のまわりにも空に亭々と伸びるポプラの木立がある。葉の茂っているときもいいし、裸の梢ばかりのときもいい。秋には鶲が巣をつくりに入る。鶲は朝鮮鳥といつて佐賀平野には多い。（「半生の記」）

さらに、「半生の記」では「鶲」という題の独立した章が設けられている。引き揚げて妻の故郷である佐賀の神崎に戻る場面である。

14

神崎の町は佐賀平野の中にある。狭い町を通り越してゆくと、一本の川の傍に出る。道はそれに沿って櫨の木の多い平野に入る。山は遠く、見渡す限りの田圃にはいくつもの掘割があった。径には翼の白い鶴が歩き、高い櫨の樹の上にも飛んでいた。

この鳥は、かつて京城の医務室の前でもたびたび見たもので、佐賀地方ではカチカラスと呼び、普通のカラスとは異った啼き方をする。その川に沿った土手路を一里も歩くと、田圃の中に一むれの聚落がある。そこが妻の生れた村だった。

佐賀のカササギをみて朝鮮でのカササギを思い出し、朝鮮でのカササギから佐賀のカササギを思い出している。カササギのいる風景からまたカササギのいる風景に引き揚げてきてているのである。戦前の朝鮮で見たカササギが戦後の引き揚げ先の佐賀のカササギにつながっているのである。清張の戦前と戦後をつなぐ象徴的な心象風景といえよう。カササギは韓国のある所にいるまさに韓国を代表する鳥である。松本清張の朝鮮体験のなかで、もつとも鮮烈で象徴的な原風景をなしているのがカササギであるが、それがそのまま戦後風景の原点にもなっている。戦中と戦後が、少なくともカササギという心象風景として強烈に結ばれているのである。また、清張が体験した朝鮮の風景としては「秋風嶺」ことがある。「半生の記」では引き揚げのときに「間もなく列車は山越えした。停った駅は「秋風嶺」とある。いい名前だと思った」とある。「遠い接近」では京城に向かう途中に、「便所に行つて窓の隙間からのぞくと、ホームの駅名は「秋風嶺」とあつた」と、いずれもカギ括弧付きに強調してその印象を語っている。

ほかに、ボプラの木立と冬の寒さも盛んに描写されている。

一方、清張の朝鮮での衛生兵体験のなかで見逃せないのは、戦時期の朝鮮の状況である。「赤いくじ」では、敗戦前後期の日本人将兵や民間人の混乱ぶりとは対照的に、防空訓練をする朝鮮人の滑稽な模様が書き込まれている。「朝鮮人が日本語で、終始、近所の両班に、／隣組の班長さん、班長さん、敵機米襲です」と、あまりにものんびりで現実感さえ失った戦時期の朝鮮風景が紹介されている（同様の記述は「遠い接近」のなかでも見られる）。さらに日本の敗戦をきっかけに劇的に変化した朝鮮の状況も書き記されている。

一夜が明けた。朝鮮人の民家という民家に国旗がいっせいに揚がった。日本人の目に見なれない彼ら自身の新しい国旗である。いつのまにそんな用意までしていたのか、日本人は呆れるばかりであった。

全くの同様の記述は「半生の記」にも繰り返されており、それらは実体験に即したものと思われる。敗戦の翌日から日章旗から作り替えた太極旗を振り回す朝鮮民衆のしたたかさ、朝鮮民衆による日本駐在所の襲撃などの模様が、同時に描かれている。また「遠い接近」では、朝鮮人志願兵と朝鮮人徴兵の不穏な動きと頻発する脱走事件が描かれ、それに同情と羨望の気持ちを抱く主人公の心理が、清張自身の戦争観を示すかのように、さりげなく書き込まれている。戦時期の朝鮮の状況を窺える貴重な資料といえよう。

八、おわりに

松本清張の作品には、衛生兵としての戦争体験、ひいては朝鮮体験がさまざまなかたちで取り込まれている。教育召集と本召集、朝鮮竜山と井邑などでの体験は、朝鮮的な原風景の中ではさまざまな形で加工され、作中に活かされているのである。一方で、これらの戦争体験としての朝鮮体験は単に過去のものではなく、戦後になつても強烈なたちで生き続け、新たな犯罪（犯罪小説）に結びついている。「網」「遠い接近」がそうであり、「繁昌するメス」でも何十年もの時間差をおいて朝鮮での兵隊体験が尾を引いている。そして、こうした清張の衛生兵としての朝鮮体験は、戦後社会に一層拡張されるかたちで、「黒地の絵」「尊嚴」「北の詩人」「日本の黒い霧」を経て、アメリカの影と朝鮮戦争を極北とする清張の戦後史観を形成していくのである。本論では直接的に朝鮮での兵隊体験が描かれている作品だけを取り上げて論じたが、それらの体験が内密化し、思想化し、破片として現れた作品までを含むと、清張の朝鮮での衛生兵体験は彼の膨大な作品のなかで影を落としている。復員兵士や医者を扱った多くの作品群はまさにこのような朝鮮での戦争体験を根底にしたものといえる。

清張自身が言つているように、軍隊は社会のもつとも強烈な縮図である。社会の構造がもつとも鮮明に凝縮されているところが軍隊なのである。清張文学においての強い社会批判はこうした兵隊体験の延長線上に由来するもので、それはいわば、兵隊としての認識がそのまま社会認識に強烈に反射されたものといえる。社会の構造が軍隊に圧縮され、軍隊体験がさらに社会に反射されるかたちなのである。その点、軍隊体験は社会と隔離された

一時的な異様な体験というようなものではない。同様のことは戦争体験についてもいえるであろう。戦争体験も、一見異様に見えるが、その内実は日常的な社会の構造が強烈に凝縮されたものであろう。その点、戦争体験も結局のところ戦後社会に還元してくるもので、戦後社会は戦中と隔離された特殊なものではない。戦後社会が戦中体験の上に成り立っているというのはこのことであり、同様な言い方でいえば、戦後文学も戦中体験の反射の中から生まれ、かたちを変えた、戦中体験の延長であるかも知れない。そしてなによりも、松本清張の描く戦後社会はこうした消えることのない戦中体験の中から形成されたものであり、またそこに清張の朝鮮体験の意味もあるようと思われる。

〔注〕

- (1) 清張の多くの年譜では、入隊時期と竜山から井邑への転属時期などが曖昧で、かつ混乱している。たとえば、講談社文庫本の年譜には「一九四三年六月に入隊し、一九四四年には南朝鮮の各地を転々としていた」とする。『松本清張事典』(勉誠出版、一九九八年六月)の「年譜」では「一九四二年十二月に教育召集を受け、翌年の一九四三年十月に久留米第四十八連隊に三ヶ月入隊して、さらに一九四四年六月に再召集されて入隊し、同年の秋に井邑に転属された」とされる。また『文藝春秋』(臨時増刊「松本清張の世界」、一九七三年十一月)では「一九四三年六月の人隊になつて」いる。一方、「文藝春秋」(臨時増刊「松本清張の世界」、一九九二年十月)、「松本清張記念館図録」(松本清張記念館、一九九八年八月)の年譜には、一九四四年六月に入隊して一九四五年に井邑に転属したと正確に記述している

が、兵隊期間の全般についての詳細な年譜を知るには不十分である。從来の年譜における松本清張の教育召集と入隊の時期が混乱をきたしているのは、松本清張本人の記憶や、「半生の記」での「十七年の十二月に私に召集がきた」「その三ヶ月してすぐに召集が来て」などというような記述、またはそれを裏付けるような私小説や作品での記述に影響されてのものと思われる。ちなみに、清張が所属した井邑の第一五〇師団は、昭和二十年二月十一日に決定され、四月から編成を開始して五月に配置を完了している。

(2) 朝鮮軍に関する記述は、宮田節子編・解説『朝鮮軍概要史』(十五年戦争極秘資料集⑯)、不二出版、一九八九年四月)、日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』(東京大学出版会、一九七一年三月)、秦郁彦『日本陸海軍総合事典』(東京大学出版会、一九九一年十月)、古野直也『朝鮮軍司令部1904/1945』(国書刊行会、一九九〇年十二月)、『京城府史』(京城府、一九三六年三月)、『ソウル六百年史』(ソウル特別市、一九七九年二月)などを参照。

(3) 「半生の記」からの引用。

(4) 松本清張「任務」(『文學界』一九五五年十二月)。

(5) 注(3)と同じ。

(6) 注(3)と同じ。

(7) 「半生の記」のなかで清張は、懲罰的な教育召集の経験のことを、「流人の赦免に話をかえて書いたことがある」と述懐している。

(8) 「遠い接近」からの引用。

(9) 「遠い接近」では、朝鮮竜山で南方転属を免れるため、主人公の山尾信治は中隊事務室の筆耕勤務を志願する。その際、山尾は「この第二十二部隊にこのままで残してもらいたかった。朝鮮軍は、朝鮮警備が重大だから、絶対に外地に出動することはない。竜山が第二十師団、羅南が第十九師団である。両師団とも朝鮮の押えである」と思うのだが、実際の両師団は後に南方に転進している。山尾信治が昭和十七年十二月に竜山に転属したという設定になつてるのでこうした記述が可能だったのである。

(10) 古野直也『朝鮮軍司令部1904/1945』(国書刊行会、一九九〇年十二月)によると、昭和十九年二月に第四十九師団がビルマに、昭和十九年五月に第三十師団が比島に、昭和十九年十一月に第十九師団が比島にそれぞれ転進している。

(11) 母岳山金山寺についての記述は、『母岳山金山寺』(わが寺刹踏査会編、文芸マダン、二〇〇〇年十月)を利用した。

(12) 井邑詞・年代未詳の百濟の歌謡。高麗、朝鮮時代を通じて宮中の宴会で歌われた。全六小節。時調の淵源とも言われている。全内容は次のとおりである。

月よ、高くぞのぼり 遠く遠くへ照し給え

市場に通い給うか 泥濘ぞ踏み給うな

なにとぞ心を鎮められよ 主の道よもやぬかるかと恐る (李秉岐訳)

(反復) オギヤ、オギヤンドリ、アオ、ダロンドリ

(13) 母岳山金山寺と井邑市内、その近辺の地理的な記述は筆者による実地調査によるものである。

(14) 「赤いくじ」の解説で、清張は「朝鮮竜山の近くに一兵卒として駐留し敗戦を迎えたときの挿話から思いついた」とし、「現実と小説の近似性を当時の私は感じた」と、作品でみるような事件があつたことを語っている。

(15) 清張の「遠い接近」のなかでは、「軍隊は、ある意味の官僚機構の縮図」であるという言葉がみられる。

【朝鮮関連作品目録】

「赤いくじ」(オール讀物)昭30・6)

「尊嚴」(小説公園)昭30・9)

「任務」(文學界)昭30・12)

「秀頼走路」(別冊小説新潮)昭31・1)

「日光中宮祠事件」(週刊朝日別冊)昭33・4)

「黒地の絵」(新潮)昭33・3・4)

「真贋の森」(『別冊文藝春秋』昭33・6)

「謀略朝鮮戦争」(『文藝春秋』昭35・12『日本の黒い霧』所収)

「厭戦」(『別冊新日本文学』昭36・7)

「繁昌するメス」(『週刊文春』昭和37・1)

「北の詩人」(『中央公論』昭37・1・38・3)

「百濟の草」(『婦人公論』昭38・3『絢爛たる流離』所収)

「走路」(『婦人公論』昭38・4『絢爛たる流離』所収)

「朴烈大逆事件」(『週刊文春』昭39・9・28・11・2『昭和史発掘』所収)

「統監」(『別冊文藝春秋』昭41・3)

「古代史疑」(『中央公論』昭41・6・42・3)

「古代探求」(『文學界』昭46・1・47・11)

「遠い接近」(『週刊朝日』昭46・8・6・47・4・21)

「網」(『日本経済新聞』昭50・3・9・51・3・17)

「その他」

「半生の記」(『文芸』昭38・8・39・1、初出題「回想的自叙伝」)

「過ぎゆく日曆」(『新潮45』昭63・7・平1・11、初出題「作家の日記」)

対談「神話と歴史」(『日本のなかの朝鮮文化』昭45・12、『日本の朝鮮文化』中公文庫所収)
対談「松本清張×井上ひさし」(『松本清張対談集 発想の原点』双葉社、昭52・8)

〈附記〉

本論文は第三回松本清張研究奨励事業の助成金によるものである。なお、本論文中の松本清張の「兵籍」に関する部分は、松本清張記念館による調査資料を利用したものである。貴重な資料を惜しみなく提供してくださった松本清張記念館のご好意に感謝申し上げる。

(南 富鎮 筑波大学・早稲田大学非常勤講師)

資料写真集



部金司園門十二第

清張が衛生兵として勤務した竜山の第20師団



桜の陸軍病院龍山館

「任務」「厭戦」の舞台になっている竜山の陸軍病院の桜

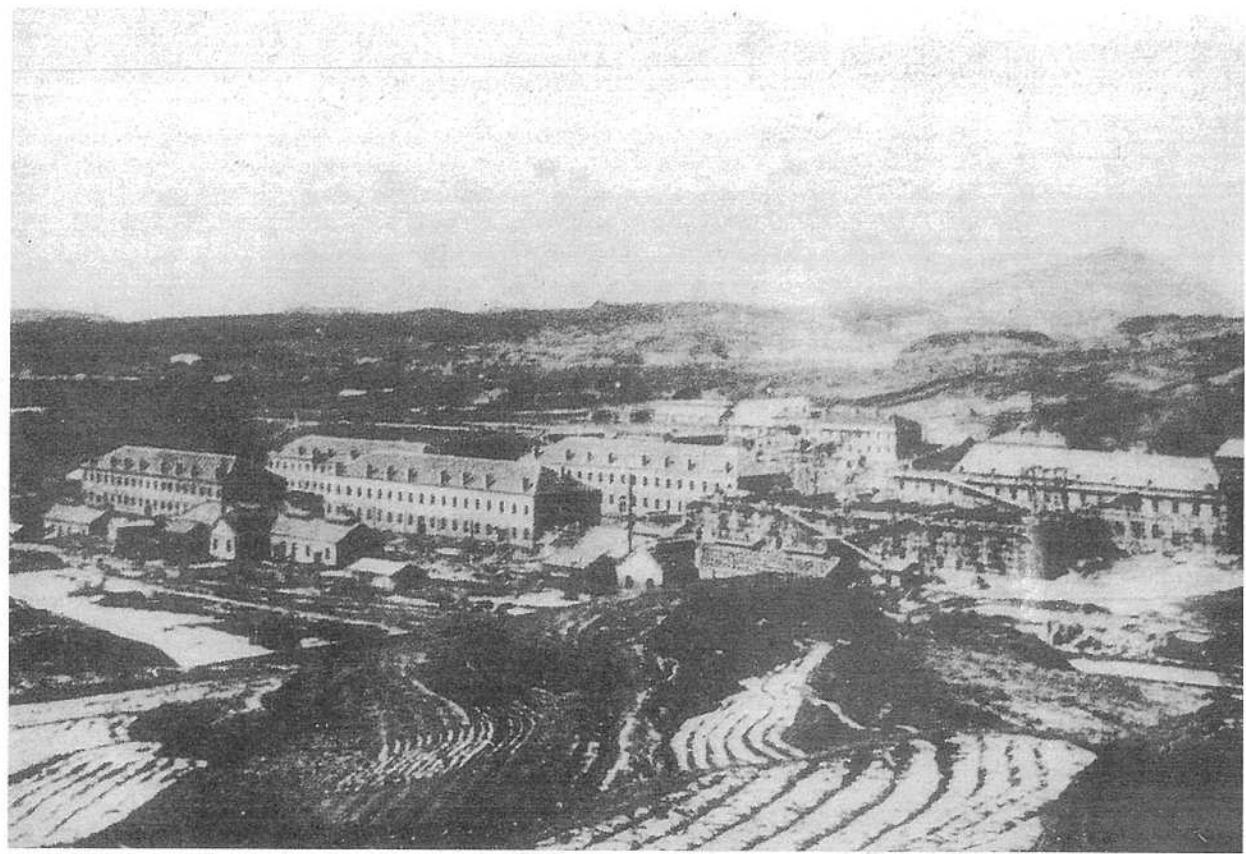


部金司軍韓朝

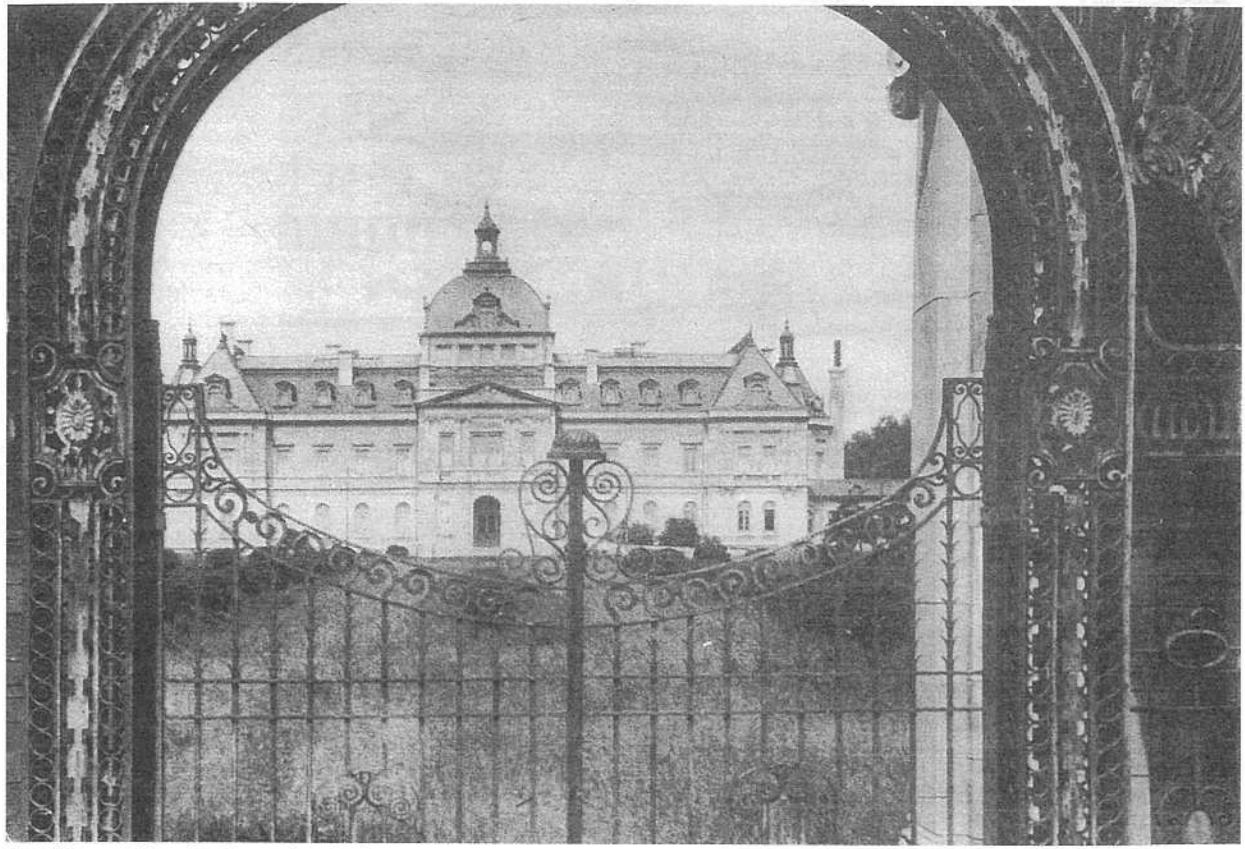


部金司園門五十第

『施政二十五年史』朝鮮總督府
昭和10.10



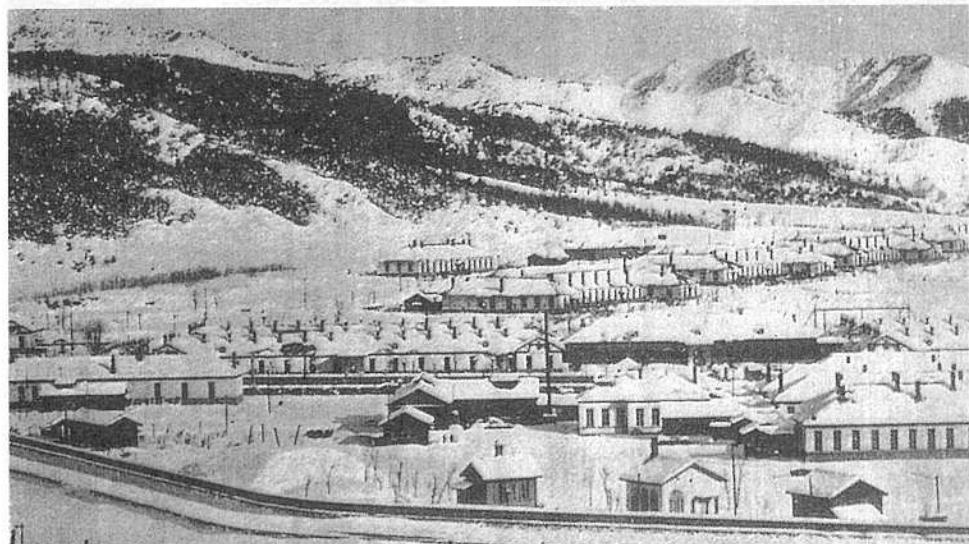
竜山に駐屯した朝鮮軍第20師団兵営全景



鉄門越しに見える朝鮮軍司令部官舎



日本が羅南を軍事都市につくりあげた後に建てた第19師団の本部建物



咸鏡北道羅南第19師団兵営全景

『写真で知る韓国の独立運動』
李圭憲著 国書刊行会 1988.11 (21.22頁の写真4枚)



現在の井邑駅



「赤いくじ」「百済の草」「走路」などの背景になっている「農学校」
現在の井邑農工高等学校



井邑農工高等学校
清張が所属していた第150師団が戦時期にここで駐屯していた



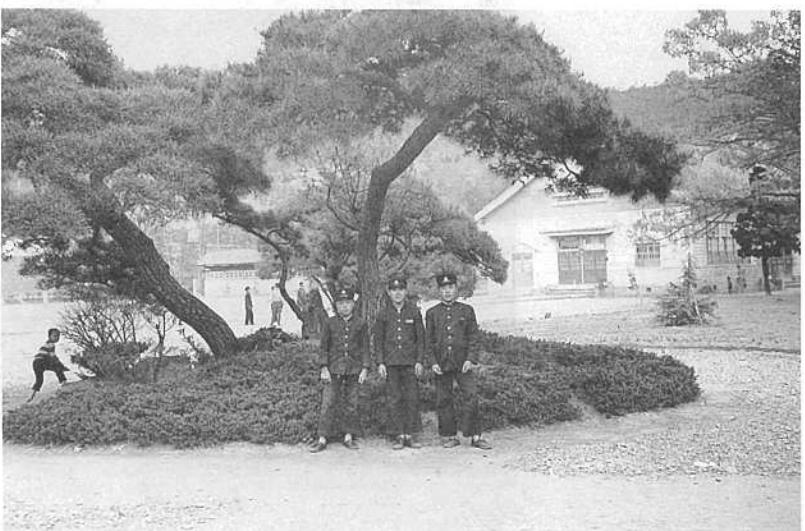
井邑農工高等学校の校庭の裏
古い建物の背後にはボプラの木の上にカササギの巣が見える



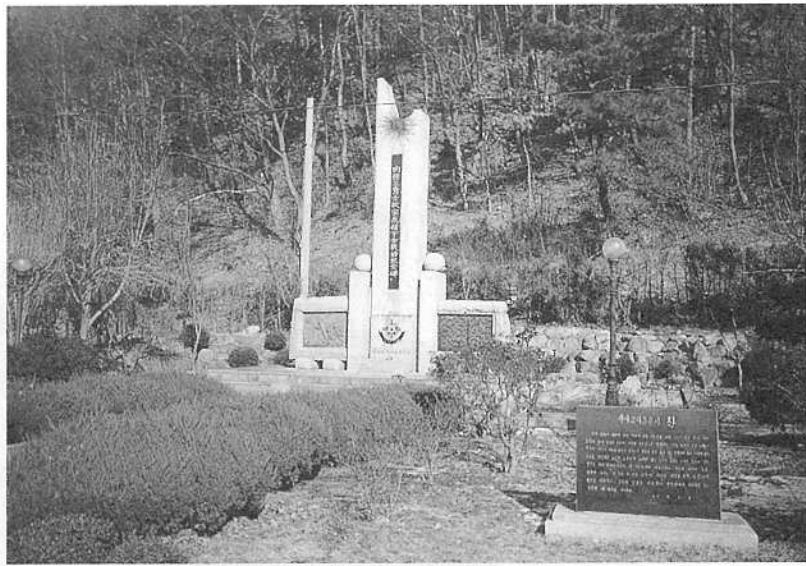
学校内の農事試験場 1970年代



新築以前の校舎
(1970年代) 2枚



新築以前の校庭の一風景



母岳山金山寺の入口にある「肉弾三勇士」の碑
朝鮮戦争時の勇士が祀られている



「百濟の草」「走路」の背景になっている母岳山金山寺の山門



母岳山金山寺の彌勒殿



母岳山金山寺の内景 3枚



望夫像
百濟の古歌「井邑詞」に因んだ
夫を待つ女の石像



百濟の古歌「井邑詞」の碑



朝鮮のカササギ（母岳山金山寺の入口）



朝鮮のカササギの巣（井邑農工高等学校）

平成十四年八月三十一日発行

第三回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行

北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二番三号

電話 ○九三一五八二一一七六一

印刷・製本

(株)ゼンリンプリントックス

松本清張研究奨励事業

第5回

募集要項

一、趣旨

時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新的活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内容

入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書など（様式は自由、ただし日本語）を、平成十五年三月三十一日までに応募してください。

五、選考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発表

審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他

採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先

〒八〇三一〇八二三 北九州市小倉北区城内二番三号
TEL〇九三（五八二）二七六一 FAX〇九三（五六二）二三〇三